

行した1例

(至誠会第二病院外科)

秋山和宏・梁 英樹・吉田一成・
山下由紀・中沢 哲

近年、癌患者のQOL重視の立場から進行癌に対する拡大手術に否定的な意見が聞かれるようになり、臨床の現場では拡大手術をめぐる混乱が生じている。今回、他医にて余命3カ月の末期胃癌と診断されながらも、拡大手術を断行して良好な結果を得た1例を経験したので報告する。

症例は56歳男性で、進行胃癌を認めたが手術を拒否し、他医で内服による免疫治療を受けていた。1年後、末期癌の宣告を受け、当院入院になった。胃体部大弯を中心に4型の胃癌がみられ、胃結腸瘻が合併していた。手術は左上腹部内臓全摘術、D4郭清を行った。現在、術後8カ月健在でQOLの劇的な改善がみられ、少なくとも本例に関しては拡大手術の意義があったと考えられた。

胃切除後の反応性低血糖(後期ダンピング症候群)にα-glucosidase阻害剤が有効であった3症例の検討

(広瀬病院消化器外科)

広瀬哲也・手塚 徹・小張加美・
長岡美妃・広瀬広人

後期ダンピング症候群に対するα-glucosidase阻害剤Vogliboseの投与の効果について検討した。

対象は胃癌根治術後に後期ダンピング症候群を呈した3例でいずれも糖尿病の既往はなかった。75g OGTTでどの症例も負荷後30~60分値の高血糖と120分値の低血糖および60分のインスリンの異常集値を示した。これらの症例に対しVoglibose 0.6 mg/日を投与した。3症例とも自覚症状が改善し、投与開始後の負荷テストにおいて食直後の高血糖、その後の低血糖の改善、30~60分後のインスリン分泌の抑制を認めた。

α-glucosidase阻害剤は後期ダンピング症候群に対する改善効果を認めた。

当院におけるgastrointestinal stromal tumor症例の検討

(防府消化器病センター・防府胃腸病院、

*九州大学第二病理)

池田 聡・三浦 修・竹下信啓・
松崎圭祐・川野豊一・戸田智博・
南園義一・長崎 進・八尾隆史*

消化管間葉系腫瘍 gastrointestinal stromal tumor

(GIST)と術前診断し得た1切除例と過去の33切除例を再検討し文献的考察を加え報告した。

68歳女性で、検診胃造影検査で異常を指摘された。各種画像診断で胃体上部後壁に5cm大の中心陥凹を有する隆起性腫瘤を認めた。周囲臓器への浸潤はない。噴門側胃切除・空腸有茎移植術(D1+α)を施行した。病理診断は免疫染色でvimentin, CD34のみ陽性のGIST uncommitted typeであった。過去の切除例の再検討では、従来胃平滑筋腫とされていた11例中7例はGIST un.であった。GIST un.は再発転移を起こすとの報告もあり、今後厳重な経過観察が必要と思われた。

特発性慢性膵炎の2手術例

(城東社会保険病院、*浜町センタービル
クリニック)

阪井 守・佐藤裕一・佐上俊和・
窪田徳幸・浜野美枝・羽生富士夫*

種々の検索にも関わらず現時点では原因が見当たらない慢性膵炎は特発性慢性膵炎として区分される。今回、われわれ特発性慢性膵炎の手術治療例を2例経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

[症例1] 37歳男性で、1年前に急性腹痛で他医に緊急入院したが、保存的治療のみで放置されていた症例である。飲酒歴はなく、その他慢性膵炎の原因はない。膵頭部に径12mm大のstoneが嵌頓し、尾側膵管が拡張し、75g OGTTは糖尿病型で、PFD試験は38.8%であった。膵管空腸側々吻合術を施行後、75g OGTTは境界型、PFD試験は88.8%とともに改善したが、1年後再び糖尿病が悪化し現在治療中である。

[症例2] 50歳女性で、膵石を指摘されていたが10年間放置され今回初めて腹痛が出現した症例である。飲酒歴は付き合い程度で、その他慢性膵炎の原因はない。びまん性に拡張した膵管内に径10mm以上のstoneが多数あり、75g OGTTは境界型で、PFD試験は20.5%であった。膵管空腸側々吻合術を施行後、PFD試験は52.3%とやや改善し、現在外来通院中である。

[まとめ]膵機能の温存という意味で、また大膵管系の膵石は膵癌の合併が高いという点で手術のタイミングを考えさせられた2症例である。

全身化学療法が奏効した膵管癌の遠隔転移例

(国立がんセンター中央病院内科)

上野秀樹

今回、全身化学療法が奏効した膵管癌の遠隔転移例を経験したので報告する。